香川大学看護学雑誌　第 26 巻第 1 号，13-24，2022

〔報 告〕

中堅看護師と訪問看護師の初回同行訪問後の在宅療養移行支援への思い

藤本 真由美[1]，佐々木 睦子[2]，大森 美津子[3]

[1] 高松赤十字病院看護部
[2] 香川大学医学部周産期学婦人科学
[3] 安田女子大学看護学部

Mid-career Ward and Visiting Nurses' Thoughts toward Home Care Support after Making Initial Post-discharge Home Visits through Collaboration

Mayumi Fujimoto[1], Mutsuko Sasaki[2] and Mitsuko Omori[3]

[1] Division of Nursing, Takamatsu Red Cross Hospital
[2] Department of Perinatology and Gynecology, Graduate School of Medicine, Kagawa University
[3] Faculty of Nursing, Yasuda Wowen's University

要旨

目的

中堅看護師と訪問看護師の初回同行訪問後の在宅療養移行支援への思いを明らかにすることである．

方法

退院後初回同行訪問を実施した中堅病棟看護師と訪問看護師 4 名ずつを対象に，半構造化面接し，質的帰納的に内容の分析をした．香川大学医学部倫理委員会と高松赤十字病院看護部看護研究倫理審査委員会の承認後実施した．

結果

中堅病棟看護師から 5 カテゴリー，訪問看護師から 5 カテゴリーが抽出された．中堅病棟看護師は，これまでの，【在宅療養支援に対する看護の振り返り】となり，入院早期から退院に向けた，【患者・家族の思いが大事】である事を改めて実感する．訪問看護師は，中堅病棟看護師との同行訪問で，【同行訪問による患者・家族の安心】と，【看護師間の顔の見える安心】を感じ，【退院後の患者・家族の状況を看護に活用】したい思いを改めて実感する．

考察

同行訪問における中堅病棟看護師の在宅療養生活に対する看護の振り返りは，今後の具体的な退院支援につながり，訪問看護師の病棟看護師にフィードバックすることは，在宅療養生活へのスムーズな移行に大切であると考える．さらに，双方の顔の見える連携は，看護師間の安心と患者・家族の安心につながり，在宅療養生活の継続に重要であると考える．

結論

初回同行訪問で中堅病棟看護師と訪問看護師が顔の見える連携をすることは，看護師間の安心と患者・家族の安心につながる．

キーワード：初回同行訪問，在宅療養移行支援，中堅看護師，訪問看護師

Summary

Objective To clarify mid-career ward and visiting nurses' thoughts toward home care support after making initial post-

連絡先：〒 760-0017　香川県高松市番町 4 丁目 1-3　高松赤十字病院看護部　藤本　真由美
Correspondence to：Mayumi Fujimoto, Division of Nursing, Takamatsu Red Cross Hospital, 4-1-3, Bancho, Takamatsu City, Kagawa 760-0017, Japan

discharge home visits through collaboration.
Methods Semi-structured interviews were conducted with four mid-career ward nurses and four visiting nurses, who had made initial post-discharge home visits through collaboration, and the contents of the interview data were qualitatively and inductively analyzed. The study was approved by the Ethics Committee of Kagawa University Faculty of Medicine and the Nursing Research Ethics Committee of the Nursing Department of Takamatsu Red Cross Hospital.
Results Mid-career ward nurses' thoughts were represented by "reflecting on one's nursing approaches to home care support" and realizing the importance of "patients' and families' emotions". Visiting nurses' thoughts, on the other hand, were represented by "promoting patients' and families' sense of security by making home visits with mid-career ward nurses", "feeling secure about direct collaboration between nurses" and they realized "the need of making use of patients' post-discharge conditions to nursing".
Discussion The reflection performed by mid-career ward nurses on their own nursing approaches to home care support may facilitate specific discharge support, and the conveying of the patients' and families' conditions by visiting nurses to ward nurses may be important for the transition from hospital treatment to home care. Furthermore, direct collaboration between these nurses may also provide an important basis for the continuation of home care, as it makes them feel secure while promoting patients' and families' sense of security.
Conclusion Direct collaboration between ward and visiting nurses for post-discharge home visits promotes a sense of security among both nurses and patients/ families.

Keywords: post-discharge home visits through collaboration, home care support, mid-career ward nurses, visiting nurses

はじめに

わが国では高齢者の慢性疾患罹患率の増加による疾病構造の変化により，医療・介護ニーズの急増に対応できる医療･介護提供体制の整備は喫緊の課題である．高齢になっても病気になっても障害があっても，住み慣れた地域で自分らしい生活を続けられるよう，医療機関とそれらの関係機関間の連携の検討を行えるようにすることが求められている（厚生労働省，2017）．

2016 年の診療報酬改定（厚生労働省，2016）では，「退院後訪問指導料」が新設され，在宅療養を担う訪問看護ステーションの看護師等と同行して指導を行った場合には，退院後訪問指導料に加算できるようになった．

松原ら（2015）は，訪問看護の同行訪問の経験は，病棟看護師が入院早期から積極的に退院支援に関わる態度に変化したと述べており，訪問看護師との同行訪問経験が支援に効果をもたらすと考える．

これまでに退院後同行訪問に関する文献は 2 文献あり，どちらも受け持ち病棟看護師と訪問看護師による退院後同行訪問の実施についての研究であった．第 1 報は病棟看護師を対象とした研究（辻村ら，2017）であり，病棟看護師が自分の行った看護を評価し，その後の患者のアセスメントと支援の幅が広がったと述べている．第 2 報は訪問看護師を対象とした研究（島村ら，2017）で，同行訪問対象者への理解が深まり，多職種との連携に向けた看護活動の変化をもたらす機会となると述べている．

しかし，2016 年 10 月の日本看護協会の調査（日本看護協会，2016）では，退院後訪問指導料と訪問看護同行加算を算定している施設は少ない現状にある．

医療ニーズの高い患者が，より安心して在宅療養に移行するためには，在宅療養移行期の医療機関と地域の連携による支援が必要と考える．そこで，退院後同行訪問を共に実施した中堅病棟看護師と訪問看護師を対象に，在宅療養移行支援に対するそれぞれの思いを明らかにしたいと考えた．本研究における同行訪問は，退院した患者の在宅の療養の場に病棟看護師と訪問看護師が一緒に訪問をした初回の訪問とした．そして，それぞれの思いを明らかにすることによって，今後の患者・家族が安心して在宅療養生活を送るための同行訪問による効果的な連携のあり方について検討する基礎資料となると考える．

目的

中堅看護師と訪問看護師の初回同行訪問後の在宅療養移行支援への思いを明らかにすることである．

方法

1．用語の定義

1）在宅療養移行支援

岩田ら（2015）は，在宅療養移行期を，退院を控えた患者が疾患や障害を抱えながら次の在宅療養生活の場へ移行する時期で，病状や生活の自己管理，生活の再構築が不安定な状況になりやすい時期と定義している．よって本研究における在宅療養移行支援は，退院前から在宅療養生活の場へ移行する時期に，あらゆる年代の患者・家族に対して，その人らしく生活できるように身体的・精神的・社会的に支援することとする．

2）思い

広辞苑（新村，2018）は，その対象について心を働かせることと記している．また，大辞林（松村，2019）では，思うこと，思うところ，考えと記している．したがって本研究では，心を働かせたり，そのことについて考えをもち，言語として述べることとする．

2．研究デザイン

研究デザインは，半構造化面接法による質的帰納的記述研究である．谷津（2016）は，質的記述的研究は，研究対象者の経験を，研究対象者の語った言葉を使って解釈し記述することで，研究対象者の経験に近づくことができる，と述べている．本研究では，退院後初回同行訪問における患者・家族が望む在宅療養移行支援に対する思いを研究対象者の語りやふるまいからなるべく離れず，推論をできるだけ少なくして出来事に忠実に解釈したいため，内容の分析とした．

3．研究対象者および選定基準

研究対象者の所属する研究協力施設は，A県内の急性期病院であるB病院と，病棟看護師と同行した訪問看護師のいる訪問看護ステーションとした．B病院は，診療報酬の入退院支援加算1を取得しており，入院後3日以内に退院困難な要因のある患者を抽出し，1週間以内に病棟専任の退院支援部門看護師や医療ソーシャルワーカー（MSW）と共にカンファレンスを実施している．

研究対象者は，B病院で5年以上の退院支援の経験を持ち，退院後同行訪問を実施した中堅病棟看護師と，退院後訪問に同行した訪問看護師とした．研究対象者の選定は，B病院の看護部長およびA県内の訪問看護ステーションの所長の推薦を受けた看護師に対し，文書と口頭で研究の目的・趣旨を説明し，同意の得られた看護師を研究対象者とした．

また，本研究における初回同行訪問は，対象者にとって初めての同行訪問経験ではなく，退院した患者の在宅の療養の場に病棟看護師と訪問看護師が一緒に訪問をした初回の訪問とした．

インタビューは，病棟看護師・訪問看護師それぞれ別の日時・場所で実施した．

4．調査方法

調査期間は2018年10月～2020年3月である．基本属性はフェイスシートにて情報を得た後，インタビューガイドに基づいた半構造化面接を行った．インタビューの所要時間は30～60分程度とした．また，インタビューは対象者の同意を得て，ICレコーダーに録音した．

5．調査内容

1）フェイスシートによる質問項目

性別，年齢，看護職の経験年数，病棟での退院支援や訪問看護の経験年数，退院後同行訪問の経験の有無と回数

2）インタビューガイド

（1）中堅病棟看護師

- 退院前後に患者・家族に実施した支援の内容と支援について感じたことや考えたこと
- 訪問時の訪問看護師の看護を知り，感じたことや考えたこと
- 患者・家族の訪問中の様子と入院中の様子の違いや変化，そのことについて感じたことや考えたこと
- 在宅療養移行期の訪問看護師と連携した支援について感じたことや考えたこと

（2）訪問看護師

- 訪問看護を実施することが分かってから訪問時までに患者・家族に実施した支援の内容について感じたことや考えたこと
- 訪問時の病棟看護師の看護を知り，感じたことや考えたこと
- 病棟看護師といる時の患者・家族の様子を知り，感じたことや考えたこと
- 在宅療養移行期の病棟看護師と連携した支援について感じたことや考えたこと

6．データの分析方法

インタビュー内容を逐語録化し，研究対象者毎に丁寧に読み込み，研究対象者に内容の確認を行いデータ

の正確性を高めた．次に文脈的に意味のある文節で区切り，1 つの意味になるように整理し切片化し，切片化したデータに現れている具体的な在宅療養移行支援に対する思いを丁寧に抜き出した．データに忠実に拾い上げ，データを洗い出し，意味や表現を検討しながらコード化した．コード間の意味の類似性に基づいて分類し，サブカテゴリー化した．サブカテゴリーの意味が同質のものをグループに分類し，カテゴリー化した．得られたカテゴリー間の関連性について系統的に記載した．

本研究は，退院後の初回同行訪問を共に実施した中堅病棟看護師と訪問看護師の在宅療養移行支援に対するそれぞれの思いを明らかにするため，病棟看護師と訪問看護師に分けて分析を行った．

また，退院後初回同行訪問を実施した中堅病棟看護師と訪問看護師の在宅療養移行支援に対する思いを包括的に理解したいため，質的記述的研究とした．そして，複数の研究者で討議を繰り返し，さらに質的研究に精通した指導教員にスーパーバイズを受けながら真実性の確保に努めた．

7．倫理的配慮

研究協力施設の看護部長，研究対象者の所属する病棟看護師長，研究対象である中堅病棟看護師，中堅病棟看護師と同行訪問を実施した訪問看護ステーション所長，退院後同行訪問を実施した訪問看護師のそれぞれに対して，説明文書を用いて研究の目的・方法について説明を行った．また，インタビュー前に，個人が特定されないような表現の使用を依頼し，自由意思での参加，匿名性の保持などを口頭と文書を用いて説明し，署名により同意を得た．インタビュー内容は，研究対象者の同意を得て，IC レコーダーに録音した．録音したデータを基に逐語録を作成し，データは鍵のかかる保管庫に研究者以外が利用できないように厳重に保管・管理した．また，文章化した逐語録および本研究で使用するデータ類については，匿名化し，個人情報が特定される内容や固有名詞は記載せず，データ番号によって管理し，匿名性とプライバシーの確保を厳守した．本研究は，香川大学医学部倫理委員会（承認番号 2019-105），高松赤十字病院看護部看護研究倫理審査委員会（承認番号 19-9）の承認を得て実施した．

結果

1．研究対象者の概要

本研究の予定研究対象者数は，中堅病棟看護師 10 名と，退院後訪問に同行した訪問看護師 10 名としていた．しかし，データ収集の後半から，社会情勢の変化により，退院後訪問が困難な状況となり，予定研究対象者数の確保が困難となったため，研究対象者数は，それまでにデータを収集できた中堅病棟看護師 4 名と訪問看護師 4 名となった．4 事例の退院後同行訪問でインタビューの協力が得られた中堅病棟看護師 4 名，訪問看護師 4 名を分析対象者とした．中堅病棟看護師の平均年齢は 38.3（± 6.6）歳，看護師経験年数は平均 15.5（± 7.2）年，退院支援経験は平均 13（± 8.6）年であった．病棟看護師のインタビュー時間は平均 42.8 分であった．一方，訪問看護師の平均年齢は，38.3（± 6.3）歳，看護師経験は平均 16.8（± 5.3）年であり，訪問看護経験は平均 5.3（± 1.6）年であった．インタビュー時間は平均 50.3 分であった．研究対象者の概要は，表 1 に示した．

2．インタビュー調査内容の分析結果

中堅病棟看護師のインタビュー4 事例より，53 コードが得られた．そして，コード間の意味の類似性に基づいて分類し，13 サブカテゴリー，5 カテゴリーが抽出された．以下，【 】カテゴリー名を表す．

中堅病棟看護師は，訪問看護師との退院後初回同行訪問によって，【病院ではみえない患者・家族の生活

表 1　研究対象者の概要

患者	病棟看護師							訪問看護師								
	研究対象者	性別	年代	看護師経験（年）	退院支援経験（年）	退院後同行訪問経験（回）	インタビュー時間（分）	研究対象者	性別	年代	看護師経験（年）	訪問看護経験（年）	病院・診療所の看護経験	退院後同行訪問経験（回）	インタビュー時間（分）	退院後訪問までの日数（日）
Ⅰ	A	女性	40 代	15	5	0	42	a	女性	40 代	23	4	あり	0	45	14
Ⅱ	B	女性	30 代	13	13	0	47	b	女性	20 代	9	4	あり	0	56	16
Ⅲ	C	女性	40 代	27	27	1	43	c	女性	40 代	20	8	あり	20	58	0
Ⅳ	D	女性	20 代	7	7	0	39	d	男性	30 代	15	5	あり	1	42	7

者としての力】に驚き，【限られた資源の中での訪問看護師のアセスメント能力】を知る．また，中堅病棟看護師が訪問看護師と初回同行訪問を実施することで，退院後に【患者・家族と多職種で情報共有する地域医療連携の力】を実感し，これまでの，【在宅療養支援に対する看護の振り返り】となる．そして，入院早期から退院に向けた，【患者・家族の思いが大事】である事を改めて実感する．

訪問看護師のインタビュー4事例より，49コードが得られた．そして，コード間の意味の類似性に基づいて分類し，15サブカテゴリー，5カテゴリーが抽出された．以下，【 】カテゴリー名を表す．

訪問看護師は，患者の日常生活を支えるために，【介護力と訪問看護のバランス】をとることを常に考えながら，在宅での看護に，【訪問看護師としての責任と魅力】を感じている．そして，訪問看護師は中堅病棟看護師との退院後初回同行訪問で，【同行訪問による患者・家族の安心】と，【看護師間の顔の見える安心】を感じ，【退院後の患者・家族の状況を看護に活用】したい思いを改めて実感する．

次にカテゴリーとサブカテゴリーについてデータを挙げて説明する．以下，≪≫サブカテゴリー名と，「」に特徴的な語りを斜体で表す．カテゴリーとサブカテゴリー一覧は表2，表3に示す．

表2　中堅看護師の初回同行訪問後の在宅療養移行支援への思い

カテゴリー	サブカテゴリー
病院ではみえない患者・家族の生活者としての力	患者の入院中とは違う反応や穏やかな表情を目の当たりにする
	在宅で病気と向き合いながら生活をしている患者の秘めた力に驚く
	家族は在宅療養生活に対応できる力や心構えを持っている
	実際に訪問に行き，工夫された環境をみて，在宅生活をイメージする
限られた資源の中での訪問看護師のアセスメント能力	限られた資源の中でその場でアセスメントをする訪問看護師の適応力に驚く
	訪問看護は患者の不十分なところを補完して，強化してくれる
患者・家族と多職種で情報共有する地域医療連携の力	退院後に患者・家族を交えて多職種で情報共有する地域医療の力に驚く
	同行訪問は，大事な情報を直接提供できる場である
在宅療養支援に対する看護の振り返り	もっと丁寧な退院支援をしたいが時間や人数の確保が難しい
	実際に行くことで看護の振り返りになり，次に活かせる
	サービスや金銭的負担の知識がなく，在宅療養生活のイメージが沸かない
患者・家族の思いが大事	患者・家族の思いを大事にしたい
	患者が納得できる退院調整をしたい

表3　訪問看護師の初回同行訪問後の在宅療養移行支援への思い

カテゴリー	サブカテゴリー
介護力と訪問看護のバランス	訪問看護で医療的な管理をして患者が困らないようにする
	介護に終わりのない家族の不安や負担を軽減したい
	家族が疲弊しないように家族の介護力と訪問看護のバランスを大事にする
訪問看護師としての責任と魅力	他のスタッフと相談して一人での訪問を不安なく訪問看護をしたい
	誰もが訪問できるように退院後患者に関わる人と情報共有する
	家庭環境の中で病院ではできない支援をすることがやりがいである
	患者・家族の気持ちを大事にして信頼関係を築く
同行訪問による患者・家族の安心	顔見知りの看護師に看てもらうことで安心できる
	病棟看護師の訪問で，患者・家族の喜びが病棟看護師の喜びにつながる
	看護師間で直接引き継いでくれることは患者・家族の安心である
看護師間の顔の見える安心	顔の見える関係はちょっとしたことでも相談できてお互いに安心である
	退院後看護師同士が連携することで，患者が安心して暮らせるようにしたい
	同行訪問は，直接確認できる心強くて大事な時間だった
退院後の患者・家族の状況を看護に活用	病棟看護師に病院と違った患者・家族の状況を知って指導に活かしてほしい
	退院後の状況をフィードバックすることが継続的な看護につながる

3．中堅病棟看護師のカテゴリーとサブカテゴリーの説明

1)【病院ではみえない患者･家族の生活者としての力】

中堅病棟看護師は，退院後同行訪問に行くと，患者は在宅という環境の中で病気と向き合いながら生活をしていることを目の当たりにして驚き，家族はアクシデントがあっても対応できる力や何かあるかもしれないという心構えを持っていることに気づく．そして，療養している患者・家族の在宅生活をイメージできることを意味する．これは，≪患者の入院中とは違う反応や穏やかな表情を目の当たりにする≫，≪在宅で病気と向き合いながら生活をしている患者の秘めた力に驚く≫，≪家族は在宅療養生活に対応できる力や心構えを持っている≫，≪実際に訪問に行き，工夫された環境をみて，在宅生活をイメージする≫の 4 つのサブカテゴリーで構成された．

≪患者の入院中とは違う反応や穏やかな表情を目の当たりにする≫

初回同行訪問で，患者が住み慣れた家で，病院でみえなかった入院中とは違う反応や穏やかな表情をしていることを目の当たりにし，在宅生活の良さを知ることを意味する．

「患者の病院と違う反応や良い表情をみてやっぱり家ってええんやなって思う」（A 氏）

≪在宅で病気と向き合いながら生活をしている患者の秘めた力に驚く≫

初回同行訪問で患者が病気と向き合いながら在宅で生活していることを知り，患者の持っている秘めた力に驚くことを意味する．

「患者は秘めた力を持っていて家族の協力を得ながら在宅療養生活ができているのを知った時，はっとさせられる」（B 氏）

≪家族は在宅療養生活に対応できる力や心構えを持っている≫

在宅療養生活において，家族の思いだけでもサポートだけでも無理で，家族の心構えやアクシデントがあっても対応できる力を持つことを，病棟看護師は初回同行訪問によって分かることを意味する．

「きちんと指導をすることで，アクシデントがあっても家族は落ち着いて対応できる力を持つことが分かる」（A 氏）

「在宅療養生活は家族の思いだけでもサポートだけでも無理で，何かあるかもしれないという家族の心構えが必要」（C 氏）

≪実際に訪問に行き，工夫された環境をみて，在宅生活をイメージする≫

初回同行訪問で，患者が過ごしやすいような環境に工夫されており，在宅で長く生活できるような生活がイメージできることを意味する．

「患者が過ごしやすく介護しやすいような環境に工夫していてびっくりした」（A 氏）

2)【限られた資源の中での訪問看護師のアセスメント能力】

病棟看護師は，実際に同行訪問をすることで，限られた資源の中で，その場でアセスメントをしている訪問看護師を見て，すごいと感じていることを意味する．これは，≪限られた資源の中でその場でアセスメントをする訪問看護師の適応力に驚く≫，≪訪問看護は患者の不十分なところを補完して，強化してくれる≫の 2 つのサブカテゴリーで構成された．

≪限られた資源の中でその場でアセスメントをする訪問看護師の適応力に驚く≫

初回同行訪問で，限られた時間と道具の中で，その場でアセスメントをしている訪問看護師をみて驚くとともに，その適応する能力を高く評価していることを意味する．

「訪問看護師は，限られた時間と道具の中で，その場でアセスメントしながら看護をしていてすごいと思う」（A 氏）

≪訪問看護は患者の不十分なところを補完して，強化してくれる≫

退院した後の医療を訪問看護で補完して，モニタリングをしてくれるところが訪問看護の利点と感じていることを意味する．

「訪問看護の利点は，日常の生活の留意点を知ってもらって患者が不十分なところを補完して，モニタリングを強化してくれるところだと思う」（B 氏）

3)【患者・家族と多職種で情報共有する地域医療連携の力】

初回同行訪問で，退院後の生活について患者・家族と多職種で情報共有できる地域医療の連携力に驚くとともに，大事な情報を直接訪問看護師や患者・家族に情報提供できる貴重な場であると感じていることを意味する．

これは，≪退院後に患者・家族を交えて多職種で情報共有する地域医療の力に驚く≫，≪同行訪問は，大事な情報を直接提供できる場である≫の 2 つのサブカテゴリーで構成された．

≪退院後に患者・家族を交えて多職種で情報共有する地域医療の力に驚く≫

初回同行訪問で，退院後の生活について患者・家族と多職種で情報共有できる地域医療の連携力に驚くと

ともに高く評価していることを意味する．
「在宅では，多職種で連携してサービスが提供できるように情報共有ができていてすごいと思う」（A氏）
「退院後同行訪問では，本人と家族と多職種で，退院後の生活で足りないものについて話し合えて良かった」（D氏）
≪同行訪問は，大事な情報を直接提供できる場である≫
同行訪問は，病棟看護師から訪問看護師と家族に器械の説明や訪問看護師の役割などの大事な情報を直接提供できる場であると感じていることを意味する．
「今回の退院後同行訪問の目的は，訪問看護師への患者さんの情報を提供すること」（A氏）
「同行訪問をすることで，病棟看護師から訪問看護師と家族に直接大事なことを伝えられる」（C氏）
「患者に訪問看護師はどんな人かを説明できたので良かった」（D氏）
4）【在宅療養支援に対する看護の振り返り】
病棟看護師は，退院後訪問により，これまでの看護を振り返り，もっと丁寧な退院支援や退院後の説明をしたいと望んでいる．しかし，病棟看護師の人数確保や退院後訪問に行く時間の確保が難しいと感じていることを意味する．これは≪もっと丁寧な退院支援をしたいが時間や人数の確保が難しい≫，≪実際に行くことで看護の振り返りになり，次に活かせる≫，≪サービスや金銭的負担の知識がなく，在宅療養生活のイメージが沸かない≫の3つのサブカテゴリーで構成された．
≪もっと丁寧な退院支援をしたいが時間や人数の確保が難しい≫
病棟看護師は，日ごろから退院支援を意識しており，退院後訪問に行きたいと思っているが，行く時間や人数の確保が難しく，退院支援に関して不十分であると感じていることを意味する．
「退院支援は日ごろから意識しているつもりだったが，十分ではないと感じる」（A氏）
「退院後訪問は，行く時間や人数の確保が難しい」（B氏）
≪実際に行くことで看護の振り返りになり，次に活かせる≫
初回同行訪問で訪問看護師と話をすることで，自分たちの看護の振り返りになり次の退院支援に活かせると感じていることを意味する．
「訪問看護師と話をすることで自分たちの看護の振り返りになり次に活かせる」（C氏）
≪サービスや金銭的負担の知識がなく，在宅療養生活のイメージが沸かない≫
病棟看護師に退院支援に対する知識が乏しく，在宅療養生活のイメージが沸かないため退院が難しいと思っていると，退院の機会を逃すと感じていることを意味する．
「退院支援は日ごろから意識しているつもりだったが，十分ではないと感じる」（A氏）
「退院後訪問に行くまで，様々な職種が関わって生活を送るイメージがつかず，在宅への生活は無理だと思っていた」（A氏）
「病棟看護師がこれでは在宅療養生活が無理じゃないんかって一方的に決めてしまうと，退院のタイミングを逃す」（C氏）
5）【患者・家族の思いが大事】
病棟看護師は退院後訪問に行くことで，家族の思いが叶えられ満足感を感じているのを見て，在宅療養生活に向けた患者・家族の思いが大事であると感じていることを意味する．これは，≪患者・家族の思いを大事にしたい≫，≪患者が納得できる退院調整をしたい≫の2つのサブカテゴリーで構成された．
≪患者・家族の思いを大事にしたい≫
初回同行訪問で，家族の思いを叶えられたのをみて家族の満足感を感じ，もっと患者・家族の思いを大事にして支えたいと思っていることを意味する．
「退院後訪問に行くことで，入院中に聞いていた，家族と過ごす時間を増やしたいという父親の思いを叶えられたのを見ることができた」（A氏）
「『私が元気なうちは生きとってもらいたい』という奥さんの思いを大事にする」（C氏）
「家族も連れて帰ってあげれたという満足感がある(感じだった)」（C氏）
≪患者が納得できる退院調整をしたい≫
院内外の医療チームが情報共有して，患者が納得できるように在宅療養に向けて調整したいと考えていることを意味する．
「患者がどこでどう過ごすことがその人のQOL(Quality of Life）なのかをすり合わせて，個別に指標を組み立てるところから退院調整や退院支援をはじめる」（B氏）
「患者が元気なうちに，多職種で意見をすり合わせて，本人が納得できるような過ごし方をさせてあげたい」（D氏）

4．訪問看護師のカテゴリーとサブカテゴリーの説明
1）【介護力と訪問看護のバランス】
訪問看護師は，家族の介護力と訪問看護のバランス

を大事にして，不安や負担を軽減できるように支援したいと思っていることを意味する．これは，≪訪問看護で医療的な管理をして患者が困らないようにする≫，≪介護に終わりのない家族の不安や負担を軽減したい≫，≪家族が疲弊しないように家族の介護力と訪問看護のバランスを大事にする≫の3つのサブカテゴリーで構成された．

≪訪問看護で医療的な管理をして患者が困らないようにする≫

医療機器を使用している患者が入退院を繰り返さず，患者が困らないようしたいと思っていることを意味する．

「在宅に移行するにあたって医療的管理が必要なので訪問看護師が入った」（a氏）

「医療機器を使用している患者が入退院を繰り返さないために訪問看護が入っている」（b氏）

≪介護に終わりのない家族の不安や負担を軽減したい≫

訪問看護師は，介護に終わりのない家族の負担が減るよう，家族の不安や負担を軽減したいと思っていることを意味する．

「家族は介護に終わりがないので，家族が判断し，休みながら介護ができるように助言をしている」（a氏）

≪家族が疲弊しないように家族の介護力と訪問看護のバランスを大事にする≫

在宅での生活は，家族が疲弊しないよう家族のパターンに応じて，家族の介護力と訪問看護のバランスを大事に考えていることを意味する．

「何でも家族にしてもらうのではなく，何でも訪問看護でするわけでもなく，家族の介護力と訪問看護のバランスは大事である」（a氏）

2）【訪問看護師としての責任と魅力】

訪問看護師は，一人での訪問に不安なく対応できるよう，他のスタッフと相談している．そして，資源の限られた家庭環境の中で，病院ではできない支援をすることをやりがいと感じていることを意味する．これは，≪他のスタッフと相談して一人での訪問を不安なく訪問看護をしたい≫，≪誰もが訪問できるように退院後患者に関わる人と情報共有する≫，≪家庭環境の中で病院ではできない支援をすることがやりがいである≫，≪患者・家族の気持ちを大事にして信頼関係を築く≫の4つのサブカテゴリーで構成された．

≪他のスタッフと相談して一人での訪問を不安なく訪問看護をしたい≫

訪問看護師は一人で判断するので，日々不安を感じており，他のスタッフと相談しながら，不安を軽減したいと思っていることを意味する．

「訪問看護師は一人の判断になるので，他のスタッフと相談しながら情報を集めて不安なく訪問看護をしたい」（b氏）

≪誰もが訪問できるように退院後患者に関わる人と情報共有する≫

毎日同じ訪問看護師が関わるわけではないので，誰が訪問看護をしても統一した看護ができるように退院後に関わる人が情報を共有していると感じていることを意味する．

「退院前カンファレンスの情報を，訪問看護師同士で共有して誰が訪問看護に行ってもいいようにしている」（c氏）

≪家庭環境の中で病院ではできない支援をすることがやりがいである≫

訪問看護では，病院ではできない家庭環境の中での支援をすることに魅力を感じ，患者・家族から感謝されることがやりがいにつながっていると感じていることを意味する．

「訪問看護では，病院ではできない家庭環境の中での支援をすることに魅力を感じ，私にもできることはあると感じた」（c氏）

≪患者・家族の気持ちを大事にして信頼関係を築く≫

訪問看護師は，患者・家族を支援できる体制をキープしないといけないと思っており，患者に合わせてゆっくりと信頼関係を築くことが大事と感じていることを意味する．

「最初は患者と壁ができないように，訪問看護師がお邪魔させてもらう立場で，患者に合わせて信頼関係を築いていく」（d氏）

3）【同行訪問による患者・家族の安心】

病棟看護師が在宅療養生活の場に来ることで患者・家族が喜んでいる姿をみて，訪問看護師は病棟看護師にとっても嬉しいことだと感じている．そして，看護師間の在宅療養生活への引継ぎを直接みることで，患者・家族の安心につながることを意味する．これは，≪顔見知りの看護師に看てもらうことで安心できる≫，≪病棟看護師の訪問で，患者・家族の喜びが病棟看護師の喜びにつながる≫，≪看護師間で直接引き継いでくれることは患者・家族の安心である≫の3つのサブカテゴリーで構成された．

≪顔見知りの看護師に看てもらうことで安心できる≫

初回同行訪問で，病棟看護師が在宅療養生活の場に来ることで患者が安心と感じていると思っていることを意味する．

「患者は顔見知りの看護師にみてもらうことで安心で

きる」（a氏）

≪病棟看護師の訪問で，患者・家族の喜びが病棟看護師の喜びにつながる≫

病棟看護師の訪問が患者・家族の喜びとなり，このことが病棟看護師の喜びにつながると訪問看護師が感じていることを意味する．

「病棟看護師が在宅に来ることで，患者・家族が喜んでくれたら，病棟看護師もきっと嬉しいと思う」（a氏）

≪看護師間で直接引き継いでくれることは患者・家族の安心である≫

初回同行訪問で，病棟看護師と訪問看護師が連絡を取り合い，直接引き継いでくれることは，患者・家族にとって大きな安心につながると感じていることを意味する．

「退院後同行訪問時に病棟看護師と訪問看護師と妻が（器械の操作法を）確認することで，すごい安心につながったと妻が言っていた」（c氏）

「患者にとって病棟看護師と訪問看護師が，直接連絡を取り合ってもらえる安心感がある」（d氏）

4）【看護師間の顔の見える安心】

病棟看護師と訪問看護師が顔の見える関係で，退院後にも連携することは，訪問看護師だけでなく，看護師同士にとっても安心であると感じていることを意味する．これは，≪顔の見える関係はちょっとしたことでも相談できてお互いに安心である≫，≪退院後看護師同士が連携することで，患者が安心して暮らせるようにしたい≫，≪同行訪問は，直接確認できる心強くて大事な時間だった≫の3つのサブカテゴリーで構成された．

≪顔の見える関係はちょっとしたことでも相談できてお互いに安心である≫

病棟看護師と訪問看護師が顔の見える関係で情報交換することは，看護添書に載っていない情報や電話で聞きにくいことなど，ちょっとしたことでも相談できてお互いに安心であると感じていることを意味する．

「退院後同行訪問をすることで，看護添書に載っていない情報や患者本人から聞けない情報を聞くことができて，電話では聞きにくいことも聞ける」（b氏）

「病棟看護師と訪問看護師が顔の見える関係で情報交換することは，病院の人にも訪問看護師がいることで在宅でも安心であると思ってもらえて，訪問看護師も病院の看護師に聞きやすくなって良い」（b氏）

≪退院後看護師同士が連携することで，患者が安心して暮らせるようにしたい≫

病棟看護師と訪問看護師が連携することで，患者の状態を悪化させずに安心して暮らせるようしたいと考えていることを意味する．

「せっかく良くなった患者さんの状態を悪化させずに安心して暮らせるよう配慮したい」（b氏）

≪同行訪問は，直接確認できる心強くて大事な時間だった≫

訪問看護師にとって初回同行訪問は，添書にない細かなことを直接確認できるので，心強くて大事な時間で安心感しかなかったと感じていることを意味する．

「退院後同行訪問での時間は，心強いし大事な時間で，安心感しかなかった」（b氏）

5）【退院後の患者・家族の状況を看護に活用】

訪問看護師は，病棟看護師に病院と違った退院後の患者・家族の状況を伝えることで，継続的な看護につながり，看護に活かしたいと考えていることを意味する．これは，≪病棟看護師に病院と違った患者・家族の状況を知って指導に活かしてほしい≫，≪退院後の状況をフィードバックすることが継続的な看護につながる≫の2つのサブカテゴリーで構成された．

≪病棟看護師に病院と違った患者・家族の状況を知って指導に活かしてほしい≫

病棟看護師が在宅での患者状況を知りその状況を踏まえた退院指導をしてもらうために，病院と違った生活を知ってほしいと思っていることを意味する．

「在宅での患者や家族の状況を知ると，それを踏まえた退院指導ができるので，病棟看護師と訪問看護師がそれぞれの立場の経験ができたらいい」（d氏）

≪退院後の状況をフィードバックすることが継続的な看護につながる≫

継続的な看護のために，退院後の患者状況を病棟看護師に返さないといけないと思っていることを意味する．

「退院後の患者の状況を病院に返さないといけないと思う」（c氏）

考察

1．中堅病棟看護師の在宅療養移行支援に対する思い

松原ら（2015）は，病棟看護師が同行訪問することによって，在宅療養生活に対して，介護を受け入れた患者の家族が余裕を持って生活していることや家庭にある物品を工夫して生活していると認識したと述べている．これは，本研究で得られたサブカテゴリー≪患者の入院中とは違う反応や穏やかな表情を目の当たりにする≫や≪家族は在宅療養生活に対応できる力や心構えを持っている≫，≪実際に訪問に行き，工夫され

た環境をみて，在宅生活をイメージする≫と同様の結果であったと考える．また，湯浅ら（2019）は，退院支援看護師が患者にとってよい退院支援のために，家での暮らしをイメージして支援につなげることと，家族のサポート力を見極めることを考えて支援していたと述べている．本研究においても，中堅病棟看護師は，実際の在宅療養生活をしている患者･家族をみて，在宅で療養する生活者としての力があることに驚きを感じたと考える．

一方，退院後同行訪問によって，中堅病棟看護師は，在宅で療養を移行していくための支援として，患者・家族の思いや希望を大事に考えながら支援をしたいと考えており，退院に向けた，【患者・家族の思いが大事】であることを実感している．これは，川嶋ら（2015）が，退院支援に必要なこととして，本人・家族の思いや理解であると述べていることと同様の結果が得られたと考える．

さらに，病棟看護師は，同行訪問に行くことで，【在宅療養支援に対する看護の振り返り】になり，その後の看護に活かせると考えていた．これは，辻村ら（2017）が述べている，“自分が行った看護を評価する”，と同様の結果となった．退院後同行訪問で，退院後の患者・家族の生活を知ることは，それまでの看護を振り返る機会となり，自身の看護を評価し，今後の具体的な在宅療養移行支援に活かせることができると考える．

2．訪問看護師の在宅療養移行支援に対する思い

髙橋（2018）は，訪問看護師が実践している家族支援として，不安や介護負担の軽減，疾患を理解することへの支援などを挙げている．これは，本研究で明らかとなった訪問看護師の，【介護力と訪問看護のバランス】と同様の結果であった．訪問看護師は，家族の生活パターンに応じて，その場の変化に対応しながら，家族が納得できるように話し合って，≪介護に終わりのない家族の不安や負担を軽減したい≫と考えていた．そして，≪家族が疲弊しないように家族の介護力と訪問看護のバランスを大事にする≫看護が，在宅療養生活を維持するために重要と考えていた．このことから，訪問看護師は，家族への支援として，不安や負担の軽減を考え，訪問看護とのバランスをとることで，在宅療養生活を継続できるように考えていることが明らかとなった．

また，【訪問看護師としての責任と魅力】を感じながら看護をしており，一人の判断で不安を抱えながらも，患者・家族と信頼関係を築きながら在宅という環境の中で看護をすることに，訪問看護師としての魅力を感じていることが明らかとなった．山口ら（2013）は，訪問看護師の職業的アイデンティティとして，社会への貢献の志向や訪問看護師として必要とされることへの自負などが挙げられたと報告している．このことから，訪問看護師は，地域において患者と1対1で信頼関係を築き，ゆっくり関わり看護をすることで，患者・家族に感謝され，患者ができなかったことができるようになっていくことにやりがいを感じていることが明らかとなった．そして，病院ではできない看護に魅力を感じ，訪問看護師として自負していると考える．

そして，【退院後の患者・家族の状況を看護に活用】したい思いを実感していることが明らかとなった．これは，島村ら（2017）が，退院後同行訪問を実施することで，訪問看護師は病棟看護師にフィードバックを行うようになったと述べていることと同様の結果となった．このことから，訪問看護師は，病棟看護師に患者状況をフィードバックすることで，病院と違った家族を含めた在宅療養生活を知ってもらい，在宅生活の視点を持ってもらいたいという思いがあると考える．また，岡本ら（2015）は，病棟看護師の退院支援に関する認識は，訪問看護師から患者の退院後の状況報告を受けることで，患者・家族が安心して過ごせるよう準備することや在宅の関係職種と連携を図るなどの認識に変化したと述べている．

すなわち，訪問看護師は，患者・家族の不安と負担の軽減を考えながら，病院ではできない支援にやりがいを感じ，退院後の患者状況をフィードバックすることが大切であると感じていた．このことは，病棟看護師による患者・家族の生活に応じた退院指導内容の充実と，在宅療養生活に関わる職種との連携，さらに在宅療養生活へのスムーズな移行につながると考える．

3．退院後初回同行訪問を共に実施したことに対する思い

中堅病棟看護師は，退院後初回同行訪問をすることで，退院後に【患者・家族と多職種で情報共有する地域医療連携の力】を実感した．これは，中堅病棟看護師が退院後に患者・家族を中心とした生活の場で，医療依存度の高い患者が安全に過ごせる地域医療連携の力を知ることで，安心と感じていたことを示す．また，同行訪問をすることにより，些細なことと相談し確認ができることは，訪問看護師にとって，【看護師間の顔の見える安心】をもたらしていたと考える．このことは，看護師同士の安心をもたらし，患者・家

族の安心・安全な療養生活につながると考える．田代（2012）は，医療者同士で連携をとって，患者・家族が“蚊帳の外”に置かれることがないよう，患者・家族に見えるかたちでつなげていくことが大切であると述べている．病棟看護師と訪問看護師が切れ目なく連携出来ていることを患者・家族が知ることが，安心につながると考える．吉田ら（2019）は，病棟看護師と訪問看護師の両者が共通にもつ連携に関する認識は，患者情報の信頼性を高めるために顔の見える連携や在宅で継続が必要な患者ケアについて患者を交えた情報交換をしたいことであると述べている．現在，行われているシームレスケアは，病棟看護師から訪問看護師に看護添書等による連携が主に行われているが，文面だけでは伝わりづらいことがある．本研究では，看護添書で伝わりづらい，患者・家族の情報や医療機器の取り扱い，医師の意向や治療内容について，同行訪問の場で直接申し送りできたことは，病棟看護師と訪問看護師にとって安心であったと考える．今回の研究では，看護師同士の思いの共有には至らなかったが，退院後早期に顔の見える連携である同行訪問をすることで，病棟看護師と訪問看護師の安心に繋がり，患者・家族の不安は軽減すると考える．また，同行訪問による病棟看護師の知識や技術の習得は，急性期病院から在宅療養へのスムーズな移行に有効であり，病院の地域連携部門と病棟及び地域医療と急性期病院との連携強化のため，さらなる同行訪問の推進が必要と考える．

すなわち，退院後同行訪問における看護師間の顔の見える連携は，看護師同士の安心であり，患者・家族の安心にもつながっていることが明らかとなった．そのことは，患者・家族が安心できる在宅療養を送るための具体的な支援につながると考える．

以上のことから，退院後初回同行訪問によって，病棟看護師は在宅療養生活をイメージし，看護の振り返りとなることで，具体的な退院支援につながると考える．また，訪問看護師は，病棟看護師へ退院後の患者・家族の状況をフィードバックすることで，継続的な看護に活かし，病棟看護師による患者・家族の生活に応じた退院指導内容の充実と，在宅療養生活に関わる職種との連携につながると考える．さらに，病棟看護師と訪問看護師が，患者家族の生活の場で顔の見える連携をすることは，看護師同士だけでなく患者・家族にとっても安心な支援につながり，在宅療養生活の継続に重要であると考える．

結論

中堅病棟看護師は，訪問看護師との退院後初回同行訪問によって，【病院ではみえない患者・家族の生活者としての力】に驚き，【限られた資源の中での訪問看護師のアセスメント能力】を知る．また，訪問看護師と初回同行訪問を実施することで，退院後に【患者・家族と多職種で情報共有する地域医療連携の力】を実感し，これまでの【在宅療養支援に対する看護の振り返り】となる．そして，入院早期から退院に向けた，【患者・家族の思いが大事】である事を改めて実感する．

また，訪問看護師は，患者の日常生活を支えるために，【介護力と訪問看護のバランス】をとることを常に考えながら，在宅での看護に，【訪問看護師としての責任と魅力】を感じている．そして，中堅病棟看護師との退院後初回同行訪問で，【同行訪問による患者・家族の安心】と，【看護師間の顔の見える安心】を感じ，【退院後の患者・家族の状況を看護に活用】したい思いを改めて実感する．

中堅病棟看護師と訪問看護師が初回同行訪問を実施することは，【同行訪問による患者・家族の安心】と，【看護師間の顔の見える安心】につながることが明らかとなった．

謝辞

本研究を行うにあたり，ご協力いただきました研究協力施設の看護部長様，看護師長様，訪問看護ステーション所長様，そして快くご協力くださいました研究対象者の皆様に心から感謝いたします．

本研究における開示すべき利益相反はない．

MF は研究の着想およびデザイン，データ収集，分析，論文作成を実施した．その過程において MS からスーパーバイズを受けた．また，MO から原稿への示唆および研究プロセス全体への助言を受け，全ての著書は最終原稿を読み，承諾した．

文献

岩田尚子，石垣和子，伊藤隆子（2015）：在宅療養移行期に在宅療養生活に対して独居高齢者が抱く心配とその変化，千葉看護学会会誌，20（2），21-29.

川嶋元子，森昌美，松宮愛，他（2015）：病棟看護師

の退院支援の現状と課題―患者が地域へ安心して戻るために―，聖泉看護学研究，4，29-38.
厚生労働省（2016）：平成 28 年度診療報酬改定の概要，https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12400000-Hokenkyoku/0000115977.pdf（閲覧日：2019 年 9 月 10 日）
厚生労働省（2017）：疾病・事業及び在宅医療に係る医療体制について，https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000159904.pdf（閲覧日：2020 年 7 月 20 日）
松原みゆき，森山薫（2015）：訪問看護の同行訪問を経験した病棟看護師の退院支援に対する認識の変化，日本赤十字広島看護大学紀要，15，11-19.
松村明（2019）：大辞林（第四版），404，三省堂，東京.
日本看護協会：「2016 年病院看護実態調査」結果報告，https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/research/91.pdf（閲覧日：2022 年 3 月 1 日）
岡本双美子，大橋奈美，田端支普，他（2015）：病棟看護師の退院支援に関する認識の変化―訪問看護師から患者の退院後の状況報告を受けて―，日本在宅看護学会誌，4（1），176-183.
島村敦子，辻村真由子，権平くみ子，他（2017）：受け持ち病棟看護師と訪問看護師による退院後同行訪問の実施（第 2 報）―訪問看護師の気づきと看護活動の変化―，千葉大学大学院看護学研究科紀要，39，11-19.
新村出（2018）：広辞苑（第七版），444，岩波書店，東京.
髙橋芙沙子（2018）：在宅認知症高齢者の家族支援に対する在宅ケア専門職の実践と家族介護者の認識―訪問看護導入事例の分析より―，兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要，25，41-55.
田代真理（2012）：「在宅移行期」に訪問看護にできること―安心な退院，スムーズな退院のために―，訪問看護と介護，17（4），292-296.
辻村真由子，島村敦子，権平くみ子，他（2017）：受け持ち病棟看護師と訪問看護師による退院後同行訪問の実施（第 1 報）―病棟看護師の気づきと看護活動の変化―，千葉大学大学院看護学研究科紀要，39，1-9.
山口陽子，百瀬由美子（2013）：訪問看護師の職業的アイデンティティの特徴および個人特性との関係，日本在宅ケア学会誌，17（1），49-58.
谷津裕子（2016）：Start Up 質的看護研究（第 2 版），158，学研メディカル秀潤社，東京.
吉田幸枝，森田みゆき，新井美保，他（2019）：在宅療養者の入退院にかかわる病院看護師と訪問看護師による連携の現状に対する双方の認識，看護展望，44（10），984-990.
湯浅香代，三宅茉里奈，森本美智子（2019）：退院支援看護師の「患者にとってよい」退院支援を目指す思考過程，日本看護研究学会雑誌，42（5），911-920.